

現象学研究会

テーマ：現象学運動の展開を探る

フッサールから現象学運動が開始して100年以上がたったが、あまりに多様に発展してきたためにその全体像を捉える試みが少ない。しかしながら現象学の運動をその歴史性を踏まえながら理解する必要がある。そこで「現象学運動の展開を探る」ことを目的として研究を行ってきた。

方法

月に一回程度研究会を開き、テーマに従って現象学運動の展開を包括的に理解する。また講師を招待し議論の場を設け、現象学運動の展開に関して理解を深める。

内容総括：現象学運動史

(1) フッサール以前。フッサール以前にはブレンターノやシュトンプがいた。他にもいたが彼らに共通していたのは科学が台頭する中で、それらに逆らって認識の普遍的な基礎づけを目指したことである。この精神がフッサールにも受け継がれる。

(2) フッサール以後。フッサール以後は、最近は三つの世代に分けられる。

(一) E・フッサールやM・ハイデガーなどの初期のドイツ現象学者（現象学の第一世代）。(二) M・メルロ＝ポンティ、J・サルトル、P・リクール、E・レヴィナスなどの後のフランスの現象学者やE・フィンク、R・インガルデン、L・ランドグレーベなどのフッサールの弟子たち（現象学の第二世代）。(三) M・アンリ（第二世代にもかぶる）J・マリオン、M・リシールやK・ヘルトなど第二世代も批判的に継承してきた世代（現象学の第三世代）。

そしてフッサール以後の現象学の発展をその意味の発生の観点から見てみるならば、フッサール以後はフッサールが暗黙の裡に前提としがちであった能動的な意味能与という意味の発生という考えを取っ払い、奥深き受動性の領野での意味の発生を思考しようとする方向に向かっている。そしてそれぞれの現象学者が重要なテーマ（身体、他者、シンボルなど）をそれぞれ探求することで現象学運動の伝統が生じ、現在へとつながっている、ということが今回の研究会で明らかとなった。

今後の展望

- ・ 多様な現象学的運動の展開（精神病理学や社会学の方向）に関して読書会によって理解を深める。
- ・ 月一回以上の開催。
- ・ 招待講師を増やして幅広く議論する。
- ・ 雑誌の発行。

メンバー

勝田岬（代表）／文研・博士後期1回生

蛸子良風／文研・博士前期1回生

森敬洋／先端研・博士3回生

任田拓央／文研・博士前期2回生

査雨萌／文研・博士前期1回生